

---

# けいおん！？

まこすけ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

けいおん!?

### 【Nコード】

N7119L

### 【作者名】

まこすけ

### 【あらすじ】

幼馴染の澁、律と共に高校へ進学した立花 京介。

律の勧めで軽音部へ入部することになった京介。

果たして、そこでどんな学生生活を送っていくのか!?

軽音部を中心とするラブコメディ。

## 軽音部へ入部！？（前書き）

けいおん！の二次創作をまったり書いた感じですよ。

原作設定の女子高ではなく共学の高校です。なので男子生徒などが  
出ます。

まあ、他の連載中二次小説の外伝みたいな話なので…。

あまり深くは、考えないでほしいです。

では、どうぞ

## 軽音部へ入部!?

まぶたが重かった。

朝の七時起きという学生なら仕方ないことなのだが…深夜の五時まで起きている俺にとって、この朝は、苦痛でしかなかった。

いつもは、母親かしっかり者の妹が起こしに来てくれるハズなのだが…今日の朝だけは、いつもと違った。

起こし方がいつもと違う。他の誰かが俺の体を揺さぶっているのだ。

このままでは、埒が明かないので俺は、仕方なく眼を開けることにした。

「起きろ京介」

そこにいたのは、俺の幼馴染、秋山澪と田井中律だった。二人共、家が近所なので昔は、よく遊んだっけ…。そんな子供の頃の思い出が頭の中を過ぎった。

「…うん？おはよう、澪…あと律」

「私は、おまけか！」

俺の返答に少し怒る律。しかし、それよりも…、

「…………何で俺の部屋に二人がいんの？」

「起こしに来てあげたのにその言い草は、ないだろ…」

そっか、わざわざ俺を起こしに来てくれたんだ…。そう思い、俺は、時間を確認するため澪に尋ねる。

「…今何時？」

「八時前だ」

授業開始時刻は…八時。

「……………遅刻だあああああつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」  
最悪の朝だった。

「着いた…!!」

「京介は足速いね…」

「朝から疲れたー!」

俺と漣、律の三人は、授業が始まる前に学校の教室へ辿り着けた。

「今更だが、また三人一緒だな」

「小学校のときからずっとね…」

席に座りながら漣がしゃべりだす。

それを見て律が少しイタズラっぽい笑みを浮かべた。

「よかつたなー漣! また、京介と同じ学校しかも同じ教室で!」

「なっ!? 別に京介は、関係ないだろ! そりゃ子供の頃からの仲だし、近所だったから…」

少し赤くなつて俯く漣。いつも、こうやって何かあると恥ずかしかるんだから…。

「わかつてるよ、漣や律も俺にとって家族みたいなもんだし。親もよくそう言ってるからな」

「いや、そういうことじゃなくて…」

「まあ、そのうち本当の家族になつたりしてな!!」

「律!!」

律は、いつも通りのテンションでこの場を盛り上げる。いつもこんな風な毎日だ。

「まあ、また三人で同じところへ行けたんだ。これから三年間よろしくな」

「うん、よろしく」

「よろしくな!」

俺の言葉に二人は、元気よく答えてくれた。

「というこどで軽音部に入ろう!」

「……………何がということなんだ？」

6限の授業が終わり、律に連れられてきた俺。

着いた場所は、音楽室。中に入ると教室の真ん中に漣がいた。

「軽音部だよ、軽音部！！」

俺の後ろから律がやって来て、そんな言葉を放つ。

「軽音部って廃部になってもうないんじゃないのか？」

同じクラスになった奴からそう聞いたんだが…。

「それが先生に聞いたら、メンバーが集まれば再建できるんだって！もちろん私が部長で！」

「お前が部長か…なんか、いいかげんな部になりそうだな」

「なんだとー！！」

しかし、律がこういう部活にやる気出すのも珍しいな。

ところで…………、

「……………漣も入るのか？」

「違うよ！律が勝手に私を勧誘して…！文芸部に入りたかったのに…………」

相変わらず漣は、律に振り回されてるんだな…。難儀な性格ってのもあるが…。

俺も律に振り回されてきた感じだしな。ここの三人は、小学生の頃からいつもこんな風に仲が良かったのだ。

「律…それで俺にも入れと？」

「頼むよー！メンバーに必要なのは5人だから…京介も入ってくれたら三人になるんだ。あと、二人なんとかすれば…部活として認められるんだよ！だからお願い！！」

俺に懇願するように手を合わせる律。コイツは、いつもこんな感じだからなあ…。

でも 仕方ないか。

「…わかった。俺、軽音部に入るよ」

俺の答えに律は、表情を明るくする。

「…ありがとな、京介！」

「別に」

「えっ…京介、入るの？」

俺の発言に驚いたのか、漣もこっちを向いて言ってきた。

「まあ、腐れ縁みたいなものだし…漣は、どうするんだ？」

漣は、俺の言葉に顔を赤くする。

視線を逸らして、こっちと顔を合わせようともしない。恥ずかしいのか？

「…私は…京介が入るなら…」

漣が小さい声で何かを話すが、正直なにを言ってるのか聞き取りにくい…。

モジモジしてるあたり漣らしいけどな。

そうしてると横にいる律が、またいつものイタズラ顔になる。

「やっぱり漣は、京介の…」

「律！」

朝のデジャヴみたいに、いつものテンションでしゃべっていると…。

「あのー…見学したいんですけど」

突然、教室の扉が開いた。

入って来たのは、金髪の女の子だった。なんか、天然系っぽいな…。

「入部希望者か？」

俺の声に反応して、律が金髪の女の子に迫っていった。

「軽音部の！？」

「いえ、合唱部の…」

「軽音部に入りませんか!？」

「あの…合唱部の」

「今、部員が少なくって…お願いします!!後悔は、させません!…つてくばあつ!？」

嫌がる女の子を無理に引きとめようとする律。しかし、そこを漣がフォローした。

やっぱり漣と律ってずっとこんな感じなんだろうな…。俺は、つくづく思った。

「そんな強引な勧誘したら迷惑だろ!!!」

「だってえ……………」

「…じゃあ、私行くから…ほら、京介も」

律の対応に吹っ切れたのか、漣が俺の手を引いて出口へ向かう。

あのー…俺、一応入るって言ったんですけど…。

しかし、漣は、俺のことなどお構いなしに手を引いていく。なんか嬉しそうにしてるし…。なんて、考えてると…、

「漣! あの時の約束は…嘘だったのか!？」

いきなり、律が大声を出した。その大声に俺と漣は、立ち止まる。

「私がドラムで漣がベース、京介がギターで…ずっと…!ずっと一緒にバンド組もうねって、約束してたじゃない!!」

漣が涙ながらに話し出す。俺も少し感傷に浸ってしまっ…。

そういつて、あの時のことを思い返していた…、

「三人で、ライブに行ったあの日に…」

……………ライブ?

「あのと時の言葉は、嘘だったのか!？」

「…その回想が嘘だ」

前に三人でライブなんて行ったことないぞ。

というより律が言ってるのは、ライブの映像のことだろう。漣の家で見た…。

「…アレ?そうだけ?」

「バンドうやるうって、律が強引に誘ってただけだろ…」

「漣もやるって言ったんだもん!」

顔を風船みたいに膨らます律。

「そうだけ…」

「それでプロになったらギヤラは、7:3で…因みに京介は、ノーギヤラで」

「アホか」



「捏造するなっ！」

「イタッ！」

澪と共に律へツツコミをする。ギャラなしで食っていけるか!!  
そうしてる俺たちが面白かったのか、。しばし傍観していた金髪  
女の子は、急に笑い出した。

「…なんだか、楽しそうですね。キーボードくらいしかできません  
けど、私でよかったら入部させてください」

それは、俺たちにとって、とても嬉しい返答だった。

「…マジ？」

「おおマジです」

笑顔で話す金髪の女の子。

「ありがとうー!!これで。あと一人、入部すれば!!」

「私も、もう人数に入ってるのね…」

澪の呆れた言葉が聞こえる。すると律は…、

「京介は、入るのにー？」

「なっ!?!…わ、わかったよ!入るよ!」

なんか、無理やりな感じがしなくもないが…。これでここにいる  
メンバーは、全員軽音部になった。

「これで四人か。あ…因みに名前は…」

「琴吹 紬です」

金髪の女の子は、話す。琴吹さんね…。

俺も自己紹介をする。

「俺は、ギターの立花 京介。そのデコがドラムの田井中 律、

隣はベースの秋山 澪だ。よろしく」

「デコって言うな!!」

律の反応に琴吹さんは、また嬉しそうに微笑んだ。

「仲が良いんですね」

「まあ、幼馴染だから。…それにしても、あと一人か…」

あと一人、誰か入らないと廃部になってしまう…。

そう考えながら俺は、次の部員が見つかることを思ったのだった。

## 軽音部へ入部！？（後書き）

アニメの第一話ですね。

普通を感じになっちゃってしまって、つまらないと思ってしまった方々、  
申し訳ありません。

アニメ第二期の終わりまで書けたらなあ…という感じでやっています。  
てます。

質問、感想、指摘など何かコメントしてもらえるとすごく嬉しいです！

では、また

## 部活のその後（前書き）

長い間、更新途絶してて申し訳ないです…。  
更新ペース自体は、正直微妙なトコですが、アニメの最終話あたり  
まで書きたい感じでやっていくので、どうぞこれからもよろしくお  
願いします。  
では本編を。

## 部活のその後

学校が終わり、夕方

「一緒にポテトもいかがですか？」

「あ…はい、お願いします」

「ありがとうございます」

俺は、漣、律、琴吹の三人と共にファーストフード店へ来ていた。目的は、ただのおしゃべり…ではなく、軽音部のことについて話すためだった。

今は、注文を終えて商品が来るのを待つばかり…。

「ついでにスマイル一つ、お願いいたします」

「琴吹と向かい合う店員さんに俺が一つ注文した。」

「ありがとうございます！！」

「ああ…！！」

店員さんからスマイルを頂き、うつとりする琴吹。

しかし、この子、なんなんだろう…。

この店に入る前から何かソワソワしているような、まるで初めて経験するように顔を輝かせていた。店員さんが何かするたびに嬉しそうに頬杖をかいてるし…。

「琴吹さんって、こういうファーストフード店初めて？」

「はい、こういう店来るの憧れてました！」

マドに憧れるって、どんなだよ…。想像もつかない。

個人的に琴吹の私生活がとても気になった。

「立花君すごいです。あんなこと聞けるなんて…。私、あんな風に店員さんが笑顔で挨拶するの、初めて見ました」

「頻繁にやると店員も怒るから、あんまりするなよ？」

「はい！」

謎過ぎる…。

そうこうしてから、商品が出来上がりトレイと共に受け取ると、俺は歩き出した。

すると琴吹は、何か言いたげに俺のほうを見上げると、

「あの…」

「何？」

「あ、あの……立花君のこと、下の名前で呼んでもいいですか？」  
「？…別にいいケド。なら俺も名前で呼んでいいか？そっちのほう  
が呼びやすいし」

「本当ですか！？じゃあ、立花君……じゃなかった、京介くんも私  
のこと細って呼んでくださいー！」

「じゃあ、これからもよろしく、細……呼びにくいからムギでも  
いい？」

「ああ……全然むしろそっちのほうが……！」

俺が付けたあだ名にムギは、めちゃくちゃよろこんでいた。至福  
の笑みと言うべきか。

ムギは、名前で呼びあうことやあだ名で呼ばれることに、多分憧  
れてたんだろう……。

ますますムギのことが気になるのだった。

「おっ、来たな」

「ごめんねー、遅くなって……」

窓際の端にあるテーブルから律が反応して、手を振ってきた。そ  
の隣に漣も座っている。

俺は、漣と向かい合うように奥へ座ると、さっそくみんなと話し  
た。

「ムギ、こういって店初めてなんだって」

「えっ？」

「そうなの！？」

「一緒にポテトもいかがですか？って言われるの、憧れてたんです」

「へえー…っていうか、ムギ？」

「はい、京介君にそう呼んでっっていたら…」

「もう、そんなに仲良く…」

急に漣は、沈んだ口調になった。隣りにいる律は、手をオデコに当てたまま、しまったという風になる。

「わ、私たちもムギって呼んでいいか!？」

「いいですよ、いくらでも！」

慌てた律は、場の空気を変えるためか、咄嗟に大声でムギに話しかけた。そして、それに同調するようにムギも言葉を返す。

「それにしても二人共、もう仲良くなっただんな」

まあ、ムギは話しやすいしな。

それにしてもなんだか、漣がさっきからこちらを見つめたまま、動かない。

「…漣、どうかしたか？」

「……京介は、誰とでも、すぐ仲良くなるな」

「昔っから罪な男だよな」。漣も、うかうかしていると誰かに取られちゃうよ〜」

「律!!！」

漣の怒声が店内に響いた。

そして、駄喋ること30分

「ところで部活のことなんだけど!!！」

律が一気に身を乗り出して、言ってきた。

そういえば部活のこと全然話してなかったな…。まあ、こうして時間を過ごすのも悪くないんだが…。

「あと一人部員を獲得するために、何かいい案をこれから考えるんだよ!!！」

周りの客のことなどお構いなしに大声で答える律。  
もう少し静かに喋れないのか。

「たとえば？」

「今入部すればすごい特典もらえるとか…」

「車や別荘とかですか？」

ムギの考えは、一般人よりもスケールがデカかった。

「いや、特典にしては、スケールデカ過ぎ…ここは、無難にピラ配りや勧誘が一番いいんじゃないか？」

「それもそうだな」

「じゃあ、ポスターでも作って、張り出そうか？」

俺の出した提案に自称部長の律が乗ったため、その日の会議は、終了したのだった…。

「じゃあ、また明日」

「お疲れ」

ムギと別れた俺と漣、律の三人は、自宅へと向かっていた。

家が近いからか、こうして三人で帰るのは、当たり前だった。

しかし、いつもと違って漣の態度がおかしい。

なんとというか…少し怒っているようだった。

「漣ちゃん、そんなツンツンしないでさ」

律がいつもの調子で、漣に話を振っていた。しかし、漣はムツとしたまま顔を崩さない。

世間一般で言う、ツンデレってやつか…？

「…別に怒ってるわけじゃないもん…」

なにか問題でもあったのだろうか。しかし、とりあえず、

「悩みか？相談なら乗るぞ」

「違う！！」

漣のチョップが俺の脳天目がけて直撃した。

正直に痛いぞ、漣。

「……ホント、鈍感なんだから……」

何かボソボソ言いながら、再び歩き出す漣。

律もやれやれといった感じで、あとを着いていく。

いつもどおりの光景だった。

「漣、律……」

「……何？」

「一緒にがんばろうな！」

「……うん」

少し元気が出てきた漣を律がからかいつつ、俺たちは自宅へと帰ったのだった。



## 部活のその後（後書き）

まだ、アニメ一期の1話にも達してない！

…やばい。

しかし、続けようと思います。

こんな小説ですが、これからも見てやってください。

けいおん部決定！（前書き）

どうも、お久しぶりです。

まだアニメ一期の一話ですが…、若干急ぎの文章ですいません。  
なるべく二期の内容に入れるよう書いていきますので、これからも  
よろしく願います。

では、ごうぞ

けいおん部決定！

「部活に遅れるなんて……」

今日こそは、新入部員が来るかもしれないのに……！！

まさか日直の当番と掃除をやらされるとは、思ってもなかった。

……日直という仕事自体、忘れていた俺にも責任があるわけなのだが。

よりもよってこの日と重なるとは……！！

そして、走り続けること数分

「遅れましたあつ、ごめん！！新入部員は！？練習は！？」

盛大な声と共に音楽室へ入った俺の目に映ったのは……。

優雅な午後のティータイムを楽しむ四人の女の子たちだった。

「……どういふことか説明しろ律」

「アハハハ……」

俺は、笑いながら誤魔化す律に少しキレ気味に話した。

その周りには、半笑いの漑とムギ、……あと知らない女の子がいた。

「……誰？」

「えっ！？……あ、あの……ひ、平沢 唯です！」

「平沢、……もしかして新入部員？」

「そ、そうだよ！それでいろいろあつて……お茶会みたいになって……ムギ！」

俺に攻められるのが嫌になったのか、ムギに助けを求める律。

「あ……このケーキおいしいわよ！」

「京介のぶんもあるから！」

漑も便乗して、俺にケーキを差し出してくる。

いつからこの部活は、お茶会になったんだ？

……まあ、いいか。別に元々怒ってたわけじゃないし……。

俺は、溲に軽く耳打ちした。

(どういうことか説明しろよ)

(なんか平沢つて子が来たのはいいけど……帰りそうな雰囲気になつちやっつて……)

(それで、餌付けしてなんとか引き止めてたつてののか?)

(うん。せつかくの新入部員をここで無くすわけには、いかないし)溲の決心は、固かった。

せつかくの新入部員だし気持ちは、分からんでもないが……。  
少し無理やりな感じがしないか……?

(うーん……でもさあ、無理に引き止めるのも悪くない?平沢さんに  
もさ)

(それは、そうだけど……)

「……ごめんなさい……軽い気持ちで入部するなんて書いたから、期待させるだけ期待させちゃって……」

その台詞に全員が不安の色を浮かべた。

やはり無理に引き止めたのは、少しやりすぎだったか……。

「こつちのほうこそ、すまない……。平沢の気持ちも考えないで勝手に話を進めて……」

しみりとした空気を変えるため俺は、平沢さんに話した。

それに乗るように溲も言葉を繋げた。

「私からも誤るよ……。無理に引き止めて、ゴメン」

来るのが遅れたとはいえ、俺にも責任があった。けど平沢に言うておきたいことがあった……。それは、

「あのさ、演奏だけでも聞いていかないか?別にいらなくてもいいからさ……一応、聞くだけ……」

「え!?演奏してくれるの!?私聞いてみたい!!」

平沢は、急に満面の笑みを浮かべながら答えた。

さっきまでの涙がウソのように、驚くほどの立ち直りの早さだっ

た……。

「……………準備するか」

俺たちは、演奏の準備に取り掛かった。

「じゃ、行くぞ。……………1、2、3！」

部のことなど関係なく俺たちは、演奏した……。

多分、平沢はこのあと帰ってしまう。けれど、そんなこと関係ない。部員は、また集めればいい。

とりあえず今は……………俺達の気持ちを演奏にぶつけるだけだ。全力全開で演奏するだけだった。

「……………終わりだ」

演奏終了からしばらくして、教室に静寂が広がった。聞いていた平沢さんもまったく微動だにしていない。その場で止まっていた。

「……………どう、だった？」

見かねた澁がおそるおそる平沢へ聞いてみた。

その言葉を聞いて目が覚めたのか、平沢はやっと口を開いた。

「あの……………なんていうか……………その、言葉にし難いんだけど……………」  
平沢の口から出た言葉は

「あんまり上手くないですね！！」

「……………ハッ？」

本音を言われた！？

まあ、プロの演奏と比べて俺たちの演奏がうまくないのは、よくわかっていただけ、こんなにズバツと答えてくるなんて……………！！

そこは、せめてお世辞でもいいから上手いって言ってほしかった

!!(オイ)

「でも、なんだかスツゴク楽しそうでした!!私!この部に入部します!!」

同時にとんでもない言葉も返ってきた。

へ?この部活に入る……?

「……………ほ、ホントに?」

「ハイ!!」

平沢さんの瞳がまっすぐこちらを見つめていた。それは、嘘偽りない本当の言葉だった。

さっきの発言から嘘付くような子には、見えないし……天然って気もするが。

俺は、今にも飛び出しそうな気持ちを抑えて、隣にいる漑へ冷静に聞いてみた。

「……………だつてさ漑」

と意味つつ漑の左頬をつねってみる。あと、ついでに律の頬も引っ張ってみた。

頬に痛さに気づいた漑たちは、改めて笑顔になる。

夢じゃない、現実だった。

「つ!!……………バンザイ!!」

律から喜びの声が上がった。

部員も全員揃ったしな。

俺は、おもむろに椅子に置いてあったカメラを手に取った。

「それじゃ、軽音部の開始記念に写真撮ろっぜ」

律もテンションが上がったのか、

「賛成ー!!ほら、漑も。京介の隣りとかいけば」

「俺の隣りイヤなのか?」

「べっ…別に…そういうわけじゃ」

「ほら撮るよ、せーの」

「あっ、ちょ待っ……」

こうして今日の初部活動は、終わったのだった。



## けいおん部決定！（後書き）

今回で一話の内容は、終りです。

次は、二話の内容などするつもりです。

唯ではなくキヨウスケが主役の視点で進めていくので、アニメの内容と少し違う部分もあります、大丈夫な方は、見てやってください。かなり不定期連載ですが、これからもよろしくお願いします。

では、また



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7119/>

---

けいおん！？

2010年10月27日17時56分発行